■フォト・エッセイ■

サクッデイ
――最後のムンタワイ族――

写真・文
久保真人
Masato Kubo

狩りの最中のガバリさんが、獲物の鳴き声に耳をすませている

月明かりが辺りの木々をうっすらと照らし出す。午前六時前、私たち三人はジャングルの奥深くを目指して歩き出した。前を行くジャガウさんとガバリさんは、動物に気づかれないように警戒しながら前進する。肩には弓と木筒。筒の中には六〇本の矢がぎっしりと詰まっている。

ふと、いつの間にか肩で息をするほど疲れていることに気がついた。時計に目をやると、歩き始めてもう二時間もたっている。だがいっこうに獲物の気配がない。本当に弓矢で狩りなんてできるのだろうか……。不安が頭をよぎった。

そのときだ。カサカサっと木の葉が揺れる音の先に、枝の上を飛び跳ねる一匹の猿が見えた。二人は急に駆け出して「ウォー、ウォー、ウォー」とうなり声をあげる。近くに人間がいることを猿に意識させるためだ。そして警戒した猿が動きを止めると、ジャガウさんはすかさず矢を抜き、静かにかまえた。次の瞬間、放たれた矢は見事に命中し、猿は地面へと墜落した。

インドネシア・スマトラ島の西岸都市パダンからフェリーで西へ進むこと半日。ここは、先住民のムンタワイ族が暮らすシベルート島だ。島に到着後、海岸の村マイレペットからスピードボートで小川を七時間、それから六時間の山登りと、渡し舟で二時間の川下りを終えてようやく最終目的地にたどり着く。

家畜の水牛に、エサとしてサゴヤシの木の幹を与える

家の前で弓矢の練習をする８歳の少年

焼きたてのサグ。もちもちとした舌触りが特徴だ

その名は、サクッデイ。一九七〇年代、ある家族が森の最奥部を流れるクッデイ川のそばに移り住んだことから、それが一族の名となり、地名となった。

インドネシアに属しながらも近年まで独自の文化を守ってきたムンタワイ族は、一九九〇年代に入ると現代文化の波に飲み込まれた。パダンから様々な物が入るようになり、昔ながらの伝統や習慣の多くが姿を消した。今となっては、真のムンタワイ文化の中で暮らしている人びとは、ここサクッデイを残すのみとなった。

早朝の狩りで捕らえた猿は、大きな鍋で一時間以上ぐつぐつと煮られ、その日の昼食になった。脂身の少ない豚肉とでも言おうか、初めて食べた猿は意外にも美味だった。そして猿の肉と一緒に口にしたのは、「サグ」という日本では聞きなれない食べ物だ。

サグの製法はこうだ。まず高さ一〇メートルほどに成長したヤシ科のサゴヤシという木を切り倒し、直径五〇センチはあろうかという木の幹を削りだす。そしてそれを水でろ過してでんぷんを抽出した後、乾かして粉状にする。最後にその粉をサグの葉で包み、長さ三〇センチほどの棒状にしたものを数十分火にかければ出来上がりだ。食感はやや硬くてもちもちしており、日本人にはどうも味気ない。またサグのほかにも、豚、鶏、エビ、タロイモ、バナナ、サ

ウマの玄関周辺で、女性がござを作っている

削りだしたサゴヤシの木の幹に水をかけ、足でこすってでんぷんだけを取り出している

お腹の調子が悪い子どもに、シケレイ（伝統療法士）の二人が薬草を飲ませて治療を施す

PHOTO ESSAY

インドネシア/Indonesia

トウヤシ（樹液を飲む）などが日常的に食べられている。海岸近くの村では、パダンから運ばれてくるインスタント麺や白いご飯が食事の中心であるのに対し（おかずがないことも多々）、現代文化から一番遠いところにあるサクッデイの食事がもっとも豊かでおいしいのは、なんとも皮肉なことだ。

サクッデイでは、血のつながった一一家族が「ウマ」と呼ばれる巨大な高床式住居で共同生活を送っている。ウマの下では豚や犬が自由に歩き回る。人々は衣服をまとわず、男性は木の皮でできたカビットと呼ばれるふんどしを、女性は下半身を隠す布の腰巻のみを身につける。また、男女ともに成人の証として全身に刺青を彫る。

「初めて警察官がやってきたときは、彼らめがけて思いっきり弓矢をぶっ放したんだ。ハッハッハ」。

そう言って過去を振り返るのは、家族の中で最年長のタウパブブットさんだ。一九九〇年代前半、開発政策を推進する政府の足は、ついにサクッデイにまで及んだ。政府は島に駐在する警察官を派遣し、サクッデイの人びとに長髪を切って衣服を着るよう求めたり、祈祷や薬草を使った伝統的な治療法をやめるように迫ってきたという。

「でも今はもう政府もそんなことはしてこないから、敵意は持っていないよ。政策

サクッデイに一番近い村、マトトナン。村にはコンクリートの道があり、家々も小さい

マトトナンにある小学校。先生の数が足りず、１～６年生までをたった二人の先生が教えている

父親が矢を作っているのに見入る二人の子ども

に対しても、特別な感情は抱いてないさ」。

一一家族の長であるライバさんは言う。事実、サクッデイの人びとは片道八時間もかかる最寄りの村で頻繁に買い物をしている。食事のときに使う器やコップはプラスティック製だし、夜になると小さな灯油ランプで明かりを灯す。また、三〇代くらいまでの人たちは、ほとんどが衣服を身につけ、刺青もしていない。学校に通ったことがある人も多く、簡単なインドネシア語なら理解できる。ライバさんは続ける。

「カビットはただのシンボルであって、大切なのはそれがもつ本当の意味。これは『恥ずかしい部分を隠す』ためにつけているんだ。昔は服がなかったから。刺青も強制的なものじゃない。自分が『成人になった』と自覚すれば彫ったらいい。お祭りの前に性行為をしないとか、そういった慣わしを守ることが重要なのであって、格好は問題じゃないんだ」。

彼らの話を聞くまで、サクッデイの人びとは外部との接触を嫌い、開発を進める政府を憎んでいると私は思っていた。だが実は彼らはとても寛容で、理解のある人びとだ。近い将来、カビットや刺青は姿を消すかもしれない。だが彼らが森に生き続ける限り、それはサクッデイの終わりを意味することにはならないだろう。

（くぼ　まさと／フォトジャーナリスト）